

■ 非日常は日常のために ■

私の家族の1人は、「週末はお寿司を食べに行くので、あと3日仕事を頑張ろう」とか、「月末に家族で温泉に行くので、今月は文句を言わず働く」といったように、目の前にニンジンをつら下げて、日々を過ごしている。

そんな気持ちで勉強している生徒もいるだろうか、修学旅行が来週に迫ってきた。ここへたどり着くために、曲折があり相当な労力を要した。元々は10月に3泊4日で台湾へ行く予定だったものが、コロナ禍で海外は無理であろうから、行き先を北海道へ変更した。それもデルタ株の猛威で中止に追い込まれ、時期も場所も変更して今に至っている。

今年度、最も翻弄されたのが修学旅行である。なにせ本校では、400人もの2年生が移動する。加えて、3泊するとなれば、宿泊施設を確保するだけでも、簡単ではない。旅行会社には、かなり無理を聞いてもらった。感謝している。

最大の問題は、急遽中止せざるを得なくなった場合のキャンセル料だった。金銭的負担はかかるが、仕方なく保険に入ることにした。しかし、保険は旅行予定者が感染して旅行全体が中止になった場合しか補償されない。他学年の感染で中止になるケースも考えられる。他学年で感染者が出ても修学旅行に出発できるような方策が課題となった。

そこで、保健所へ出向き、校内での感染予防についてアドバイスをもらい、出発5日前から、2年生と他学年の接触を原則禁止することにした。食事場所、トイレを別にし、部活動は学年ごととした。生徒たちに不便をかけるが、最小限にとどめられたと思っている。

さて、本題に入ろう。行事を行うときに、心がけてほしいことがある。受動的にならないことである。修学旅行でいえば、旅行会社が用意した旅行にただ参加するのでは面白くない。例えば、バス移動の時間が楽しいものになるように生徒たちに何か企画をさせてみるのもいい。楽しい時間を自分たち自身で演出できれば、思い出はさらに深くなる。

もう一つ大切なことは、「非日常をその後の学校生活にどう生かしていくか」ということである。先の私の家族のような、楽しみにしている非日常のために日常があるという考え方を否定はしないが、ご褒美がないと努力できないのは寂しくも感じる。

旅行の楽しみは3つある。出かける前のワクワク感、旅行中の非日常感、思い出に浸るまったり感である。もちろん旅行は楽しく無事に帰着することが第一である。しかし、ホーム担任や学年主任は、修学旅行を通して、人間関係をどう深めていけるか、集団としてどう成長していけるか、という目的を持っているはずである。目的の達成のためには、帰ってからの日常の充実の方が重要であり、生徒自身がそう捉えていなければいけない。

非日常のためにそれまでの日常があるのではなく、非日常はその後の日常のためにある。行事はゴールではなくスタート。日常の充実こそが人生の充実である。